春の夜の夢

藤林 望花
福岡県立博多青松高等学校

推しとは、主にアイドルや俳優について用いられる日本語の俗語であり、人に薦めたいと思うほどに好感を持っている人物のことをいう。（Wikipedia より引用）その人が右と言えば左も右のような気がした。私の世界は“推し”というただの“人間”に左右されていた。

はじめは、歌が好きだと思った。性格が悪く、友人が少ないというキャラクターで活動をしていた推しは、自分への嫌悪感や人間関係の希薄さに悩んでいた自分と重なり、孤独は悩みから推しとの共通点になった。本当の顔も名前も分からない推しが、自分の分身のようだと思った。

フォロワーが 1 人増える。グッズが完売する。共通点を持つ推しの成長は、まるで自分の成長のようにも感じ、嬉しかった。それから推しは急速に成長していった。はじめ100人しか見ていなかった推しの生放送は、1000 人に見られるようになった。一方で私の人生に劇的な変化がある訳では無い。孤独なままの私と、孤独ではなくなった推し。

私と推しは共通点を失い、気付けば分身のようであった推しは、憧れの神のような存在になっていた。どんどん推しに対してのめり込み始めた私は、自分の生活を推しの活動を主軸に動かすようになった。睡眠時間を削って推しの活動を追った。

パブリックサーチとは、自分では無く他人を検索することである。毎秒ごとに全世界の誰かが推しについて発言をしていて、そこには推しへの賞賛があるはず。神の威厳を確認するように、推しの名前でパブリックサーチをした私の目に飛び込んできたのは、推しへの非難の声だった。

性格が悪いというキャラクターは、人を選ぶ。そのため、推しの好感度は高いとはいえなかった。けれど、生活の主軸を推しにしていた私にとって、推しを否定されることは、自分を否定される事のようだった。

授業中でも、頭の中をぐるぐると非難の言葉が巡る。こうして、推しへの非難に囚われた私は、暇さえあれば推しの名前でパブリックサーチをするようになった。はじめはパブリックサーチのみだったが、匿名掲示板の閲覧にまで及ぶようになった。

いくら好感度が低いと言っても、目にするのは、非難の声ばかりではなかった。にも関わらず、私の頭の中は応援の声ではなく、非難の声ばかりだった。

パブリックサーチと匿名掲示板の閲覧を繰り返す日々。気付けば、推しを純粋に見れなくなっていた。推しとの時間は、以前のように楽しいものではなくなり、推しの一挙手一投足に非難される要素を探すようになった。段々、パブリックサーチや匿名掲示板での非難に、思考が同調するようになった。

はじめは、歌が好きだった。それだけだったのに、推しへの非難の声に胸を痛めながら同調していた。推しの活動よりも、推しの活動へのパブリックサーチや匿名掲示板での反応が気になった。“推し”というただの“人間”に左右されていた私の世界は“匿名”の不特定多数の“文字”に左右されていた。

“猛き者も遂にはほろびぬ、ひとへに風の前の塵におなじ。”（作者不詳『平家物語』より引用）平家物語の冒頭部分は、私に勝手に心酔されてしまった推しの顛末のようだと思う。このままではいけないと思い切って推しの情報を得る手段を全て遮断して、距離を置いてみると、驚く程直ぐに興味を失った。自分の薄情さに驚いた。

この世界も、推しへの感情も、常に変化している。やがては推しとの楽しかった時間もただ春の夜の夢の如く知らぬ間に忘れて、私の世界も変化し続けるのだろう。